平成２０年度「高等学校における発達障害支援モデル事業」報告書（中間・最終）

都道府県名	兵庫県
学校名	姫路別所高等学校
学校所在地	姫路市別所町北宿３０３－１
研究期間	平成２０～２１年度

Ⅰ　概　要

1　研究課題

特別支援学校等との連携による発達障害のある生徒に対する教育の研究

2　研究の概要

生徒ひとりひとりを大切にし、そのニーズに応えようとする特別支援教育の発想や方法は、障害の有無にかかわらず全ての生徒に有効である。本校では、その立場からユニバーサルデザインの教育をめざし、以下の４点を主な課題として研究を進める。

①発達障害を持つ生徒に対する個別支援
②生徒の自己肯定感を育てる指導
③「集中でき、わかる」授業の研究
④就労支援につながるソーシャルスキルトレーニングの実施

3　研究成果の概要

①発達障害を持つ生徒に対する個別支援

キャンパスカウンセラー・養護教諭を中心に、本人だけでなく保護者をも含めた支援を実施した。その誠実な活動は保護者や生徒の信頼を得、新たな対象の発掘にもつながった。

②生徒の自己肯定感を育てる指導

学校行事等を活性化して生徒の活躍の場を広げるとともに、ＰＴＡ会報や学年通信等でその成果をこまめに顕彰することによって、学校全体が（「困った」、実は「困っている」生徒を含め）、目に見えて落ち着いてきた。また、生徒の成長を丁寧に観察し、日頃の声かけにつなげることも大きな効果があった。

③「集中でき、わかる」授業の研究

生徒の「困り感」に即した板書や発問の工夫等、授業改善の気運が学校全体に高まり、生徒のやる気を引き出しつつある。

④就労支援につながるソーシャルスキルトレーニングの実施

大学等専門機関と連携して、３年間を見通した全７回のソーシャルスキルトレーニング「Nice Man / Nice Woman 計画 2009」を計画し、今年度はその第1回を試行した。自己理解を中心としたクラス単位のアクティビティは教員・生徒ともに好評であり、今後の展開が期待される。

Ⅱ　詳細報告

1　研究の内容

(1)発達障害のある生徒に対する指導方針

ア 生徒の実態（把握方法も含めて）

①発達障害であると医師の診断を受けている生徒　３名

生徒	学年	診　断　名	備　考
A	2	広汎性発達障害	本校教員の薦めにより受診
B	2	自閉症	保護者より申し出
C	3	言語発達障害	本校教員の薦めにより受診

②スクリーニングチェック（「児童生徒理解に関するチェックリスト（文部科学省平成 14 年実施）によって支援が必要と考えられた生徒　２８名

１年生				２年生				３年生			
生徒	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	生徒	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	生徒	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1	＋			13	(＋)	(＋)		22		＋	
2		＋		14		(＋)		23		(＋)	
3		＋		15		(＋)		24	(＋)	(＋)	
4	＋	＋	＋	16		＋		25		＋	
5		＋		17		(＋)		26		＋	
6		＋		18		(＋)		27		＋	
7	＋	＋		19		＋		28		＋	
8	＋			20		(＋)					
9		＋		21		＋					
10		(＋)									
11		(＋)									
12	＋										

基準値を超えるもの＋

基準値とほぼ同等のもの(＋)

Ⅰ「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」（学習面で困難を示す）

Ⅱ「不注意」「他動性－衝動性」（行動面で困難を示す）

Ⅲ「対人関係やこだわり等」（行動面で困難を示す）

イ 指導方針

上記実態調査を実施するまでもなく、本校の生徒には「他動性－衝動性」を示す者が多く見られた。従来は落ち着きのない、じっとしていられない「困った子」として立ち現れるそうした生徒達を、「困っている子」として新たに捉え直すことがこの事業の始まりであり根幹である。今年度は手探りながら以下のような方針を共通理解として指導及び支援に当たった。

①生徒の「困り感」についてこまめに情報交換し、最適な支援方法を探る。

②生徒の状況に応じて活躍できる場を設定し、自己肯定感を育てる。

③指示に関しては、視覚支援・聴覚支援を念頭に多様な方法を用いる。

ウ 成果と課題

学校にあふれている「困った」子が、実は「困っている」子であったという教員側の気付きは学校全体を大きく変えることとなった。生徒・保護者・教員ともにストレスを減らし、学校行事や委員会組織の見直しなど前向きな取り組みが目立ってきた。今後は、学校評価の項目にも溶かしこまれたこれらの方針を、さらに効果的なものに修正していく必要がある。

(2) 発達障害のある生徒に対する授業やテストにおける評価方法等の工夫

ア 授業の際の配慮事項等

本校では発達障害のある生徒を通常の授業から取り出して指導することは行っていない。そのため、以下の項目については全て「発達障害を持つ生徒及びその生徒を含む集団」を対象としている。

項　目	配　慮（工　夫）事　項
座　席	・後方、窓側が落ち着く ・前、中心で常に教師に関わってほしい気持ちに対応できる。
指　示	・集合時に、必ず座らせてから説明をするようにする。 ・声で指示すると同時にその内容を板書し、さらに机間巡視等を通じて個別に指示する。
板　書	・黒板に本時の内容を毎時同じ場所に明示する。 ・黒板の指示（ノートに写す、参照ページなど）は、決まった色のチョークで書く。また、ノートのどこに書くかも指示する。 ・板書事項をノートに書き写す時間を与える。
プリント	・作成の際に見やすさ・書きやすさを配慮する。 . 書きながら授業内容をまとめるプリントを多用した。 ・問題を模造紙に書き、生徒がどこをするべきかすぐわかるようにする。
小テスト	・合格できるように、前時に筆写や音読できっかけを作り、「達成感→次もがんばる」という流れを作る。 ・授業プリントを見ればできる、復習問題をこまめに実施する。 ・範囲を狭くする、授業中に練習の時間を取り入れる、同じ範囲を繰り返し行う、難易度を下げる等の工夫をする。
組み立て	・授業を短いパーツごとに組み立て、パーツごとにがんばれるようにメリハリをつけ、スタンプを与える活動も入れる。 ・黒板に”Today’s Lesson”というコーナーをつくり、ひとつ活動が終わるたびにチェックマークを入れるようにする。 ・講義形式よりも、参加型の生徒が考えて答えを出せるような授業形式にする。 ・作業を取り入れ、集中力向上と勉強方法の提案を図る。

やる気づくり	・小さな活動に対しても達成感が得られるようにスタンプを与える。 ・板書、練習問題を考査問題に直結できるようにする。 ・すぐれた作品等を廊下等に掲示し顕彰する。
該当生徒支援	・該当生徒の表情やしぐさを丁寧に観察し、必要があれば再度説明をする等の支援を行う。 ・ＴＴを活用し、該当生徒のサポートを実施する。

イ テストにおける配慮事項等

生徒の実態に即し、以下のような配慮を行ったが、発達障害があるということでの特別扱いはしていない。

①ゴシック体や太字の活字を適宜用い、見やすくする。

②テスト自体を、まず習った内容を整理しながら表にまとめていく形にし、次にそれを使って問を解くワークシートのようになるよう意識して作る。

ウ 評価における配慮事項等

発達障害のある生徒が不利にならず、またやる気や達成感を持って次に向かえるよう、以下のような工夫がなされた。

①実習時に進度表を作り、点数化する。

②提出物の締め切りやルールを明確にして徹底する

③生徒同士の相互評価（長所をコメントする）を活用する。

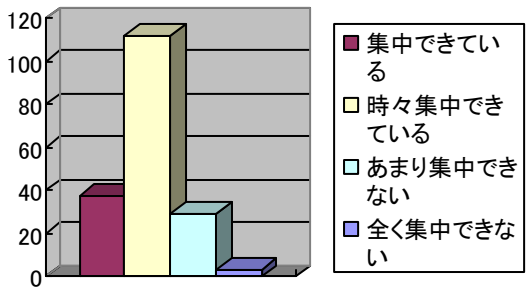
④個々の能力に対する達成度、意欲・関心等を重視する。

エ 成果と課題

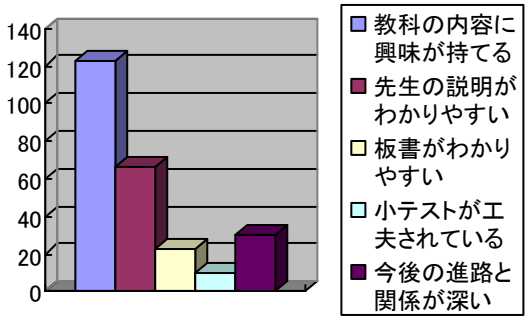
今年度は各教員が意欲的に授業改善に取り組んだが、それぞれの場所で様々な支援を試みた段階にとどまった。次年度はその方法や成果を学校全体で共有し、教員相互だけではなく、生徒の評価もとりいれながら、生徒誰もが「集中し、わかる授業」づくりに取り組んでいきたい。

参考　１年生（192 人）対象生徒アンケート　単位：人　）

授業に集中できていますか



集中できる理由は何ですか



(3) 発達障害のある生徒に対する就労支援

ア 支援の方策と内容

本校では、これまで２年時にＬＨＲと総合的な学習の時間を活用して「自己のキャ

リアを探求する」を実施し、生徒の職業意識を育ててきた。本事業では、兵庫教育大学准教授井澤信三先生のご指導のもと、さらにその内容を発展させるべくソーシャルスキルトレーニングを下記のように計画し、今年度は現１年生を対象にその第１回を試行した。

Nice Man / Nice Woman 計画 2009

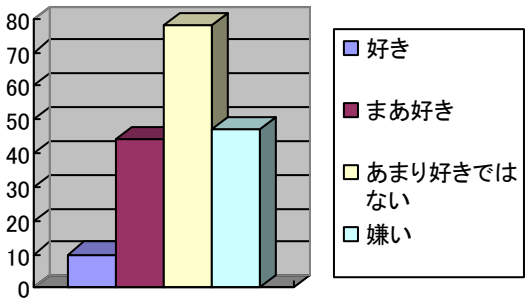
①自己理解「自分の長所を知ろう」
②仲間作り［友達の定義］
③上手な話の聴き方［何もリアクションしない・偉そうな聴き方］
④上手な話し方［ことばづかい・アサーション］
⑤グループワーク［活動名：危機からの脱出］
⑥上手に断る［言いがかりをつけられた時・友達から嫌なことをされたときの対応］
⑦ストレス・マネイジメント［自分のストレスを知る→イライラしたときにできる直ぐの対応・あとあとの発散の仕方］

イ 成果と課題

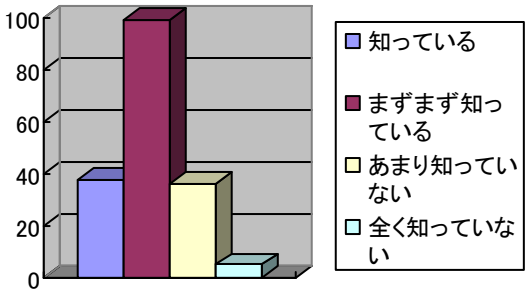
本校の実態に鑑み、「今年度と来年度の２年間を見据えた目標設定としては，『発達障害に特化する』『就労に特化する』というよりも，全般的なソーシャルスキルアップを目指すことがよいように考える。」との助言（兵庫教育大学　井澤信三准教授）受け、この企画はクラス単位で第一学年全体を対象として実施された。

自分に自信のない生徒が将来の展望を持てるはずもなく、今回の企画はキャリア教育の何よりの導入になったと思われる。アクティビティ後実施されたアンケート結果を下記にあげる。（単位：人）

自分のことが好きですか



友人はあなたのいいところを知っていますか。



しかしながら、現実のソーシャルスキルトレーニングは日頃の服装や挨拶などの地道なマナー指導に負うところが大きい。この点に関しても今年度は頭ごなしではなく、「根気強く丁寧に」「ゆっくりと問題点を明確にしながら」の指導が試みられ、功を奏した。

次年度はさらに自己肯定感を育てながら、実のあるソーシャルスキルトレーニングを実施していきたい。また、発達障害を持つ、あるいは持つ可能性のある生徒に対する個別の就労支援も専門機関との連携等を視野にいれ、特別支援教育コーディネーターを中

心に組織的にかかわっていきたい。

(4) 一般の生徒に対する理解推進等の指導の在り方

ア 指導の工夫と取組

発達障害とは、と大上段に構えず、地道に多様性を認められる集団を作っていく中で、自閉傾向や「キレやすさ」も個性として理解し、尊重するよう指導した。また、クラスや部活動では「仲間はずれ」にならないよう居場所作りにも気を配った。

イ 成果と課題

例えば「キレやすい生徒」に関して、「徐々にではあるが（その生徒が）できることは増えてきた」、あるいは「みんなと一緒に取り組むと行動しやすくなる」といったように、周囲の理解と協力に言及しながらその成果を確認することは、あきらめ気味だった周囲の意識改革につながった。また同時に、周囲がより「理解・協力」すると本人もさらによくなるといった好循環も見受けられた。

今後も自己肯定感を育てていく指導を通して、自分同様、周囲の誰もを大切な個性ある存在として認め、「いじめ」や「からかい」の衝動を起こさない生徒作りをめざしていきたい。

(5) 教職員や保護者の研修等

ア 研修会開催の回数・時期・研修内容等

回数	時期	対象	研修内容
1	20 年 6 月	教員	基礎研修Ⅰ「発達障害について」 講師：キャンパスカウンセラー（臨床心理士）
2	20 年 6 月	教員	拡大学年会議 助言者：キャンパスカウンセラー（臨床心理士）
3	20 年 7 月	教員	基礎研修Ⅱ「発達障害支援教育について」 講師：県教育委員会事務局特別支援教育課 主任指導主事兼係長
4	20 年 7 月	教員	ケース会議 助言者：キャンパスカウンセラー（臨床心理士）
5	21 年 3 月	教員 保護者	「子ども達の夢を実現させるために」 ～そのアドバイスが子どもをだめにする～ 講師：神戸セミナー校長　喜多徹人氏（臨床心理士）

イ 成果と課題

２回にわたる基礎研修を経て、ようやく本事業はスタートした。それぞれの研修会に引き続いて実施された学年会議では「気になる生徒のピックアップ」が実施され、ケース会議では顕著なケースを取り上げ今後の支援方法について話し合った。その際用いられたカルテには生活面・学習面の他部活動等、あらゆる方面から情報が寄せられ、生徒を何とか支援しようとする教員の意気込みが感じられた。

従来ならば、様々な二次障害の結果進路変更を余儀なくされていた生徒が、今年度は教師との衝突も少なく、元気に進級できそうなのが何よりの成果である。

３月の保護者を交えた研修会では自信を育てる「声かけ」の方法など具体的に学ぶことができた。次年度は、教員から要望の多い具体的な授業方法についての研修を充実させる予定である。

(6)その他の支援に関する工夫

ユニバーサルデザインの教育環境作りの一環として、時間割変更を知らせる「生徒向け掲示板」を改善した。

２　研究の方法

(1)研究委員会の設置

ア 構成

NO	所　属　・　職　名	備　　考
1	教頭	委員長
2	特別支援教育コーディネーター（第１学年副主任）	事務局
3	生徒指導部長	
4	生徒指導副部長	
5	養護教諭	
6	第１学年保健係（第１学年担任）	
7	第２学年保健係（第２学年担任）	
8	第３学年保健係（第３学年担任）	

イ 委員会開催回数・検討内容

本校では研究の趣旨を明確にするため、今年度は委員会の名称を「新しい生徒指導を考える会」とし、以下の通り研究会を開催した。

	開催時期	検　討　内　容
1	20 年４月	委員会の名称決定 今年度の計画
2	20 年５月	職員研修会の計画
3	20 年９月	学校訪問報告 （滋賀県立日野高等学校・長崎県立鹿町工業高等学校）
4	20 年 10 月	今年度の計画の修正及び次年度の計画
5	21 年１月	学校訪問報告 （福島県立川俣高等学校） 職員研修（兼保護者向け講演会）の計画 今年度のまとめについて

ウ 特別支援教育コーディネーターの指名や個別の教育支援計画の策定等具体的な方策

今年度指名された特別支援教育コーディネーターは第 1 学年所属の副主任であり、他学年に所属する該当生徒の個別支援にあたることは困難であった。そのため、その任務のほとんどを養護教諭が担うこととなった。

また、7月に実施したケース会議では、詳細な「カルテ」を用いて関係職員の共通理解は図ることはできたものの、それを発展させて「個別の教育支援計画」を作成する段階には至らなかった。

エ 成果と課題

特別支援教育コーディネーターが学年所属の副主任であったことは、現場リーダーとして当該学年を中心に授業改善等の働きかけを実施したり、生徒の反応をとらえたりすることには有効であった。しかしながら、個別に支援を必要とする生徒には、他学年に所属することもあり、全く対応することができなかった。

個別支援例（広汎性発達障害）

6 月・拡大学年会議
7 月・個別支援計画立案
（担任、学年主任、養護教諭、C.C）
・面談
（担任、保護者）
・C.C によるカウンセリング
（本人及び保護者　※別々に）
・ケース会議
（学年団、養護教諭、C.C）
10 月・面談
（養護教諭、保護者）
・C.C によるカウンセリング
（保護者）
12 月・C.C によるカウンセリング（2 回）
（保護者）
・面談
（担任、保護者）
1 月・C.C によるカウンセリング（2 回）

＊C.C：キャンパスカウンセラー

その分、キャンパスカウンセラーの相談窓口であった養護教諭がその任務を代行せざるを得ない状況となってしまった。カウンセラー、養護教諭ともども当該生徒や保護者の信頼を得て充実した支援が行われたが、ケース会議の開催、「個別指導計画」の作成、専門機関との連携等、コーディネーターの仕事にあたる部分は不十分なままとなってしまった。

次年度は個別支援にも対応できる組織づくりが急務である。

(2) 専門家チームの活用

ア 構成

NO	所　属　・　職　名	備　　考
1	兵庫教育大学准教授 臨床・教育学系（特別支援教育）	教育学博士 臨床心理士
2	カウンセラー	臨床心理士
3	県教委事務局特別支援教育課主任指導主事兼係長	
4	県労働局職業安定部職業対策課雇用対策係主任	

イ 専門家チームの活用状況

NO	回数	内　　容
1	4	①本校の取り組みに対する全体的な指導及び助言 ②ＬＨＲや総合的な学習の時間を活用した、体系的なソーシャルスキルトレーニングの計画及び指導
2	37	①職員研修（基礎研修１：発達障害の概要）講師 ②ケース会議での助言 ③個別支援
3	1	①職員研修（基礎研修２：発達障害支援教育）講師
4	1	①就労支援に関する助言

ウ 成果と課題

特別支援教育にかかる経験や知識をほとんど持たない教員が多数を占める本校において、専門家の活用は不可欠である。今後は学校組織を整備し、特別支援教育コーディネーターを中心にますます専門機関との連携を深めていく必要がある。

(3)関係機関との連携

ア 他の高等学校や特別支援学校との連携

本校は近接する姫路特別支援学校と、２０年来下記のような交流事業を実施してきた。

①姫路特別支援学校生→本校

文化祭や体育祭への招待（それぞれ２０名程度）

②本校生→姫路特別支援学校

授業参加（年２回　それぞれ１０～２０名程度）

「ひめよう祭」参加（クッキー等模擬店出店　生徒会を中心に数名）

また、今年度は姫路特別支援学校主催下記の研修会に本校より３名参加し、うち１名（特別支援教育コーディネーター）が本校の実態と取り組みについて発表した。

10／22　スキルアップ研修会「広汎性発達障害の理解と支援」
講師　兵庫教育大学　准教授　井澤　信三　先生

イ 発達障害者支援センターやハローワーク等関係機関との連携

①言語発達障害の診断を受けた生徒に、クローバー「あかりの家」（ひょうご発達障害者支援センター）を紹介した。

②本校特別支援教育コーディネーターが兵庫発達障害者等就労支援連絡協議会（兵庫労働局主催）の委員に就任し、就労支援について各専門機関とともに検討する機会を持った。

８／20　第１回　各機関（１４団体）の取り組み、活動の説明
＊その後、発達障害者就労支援セミナーに参加
３／４　第２回　障害者の雇用について　～雇用する側・される側～
＊その後、日本パーソネルセンターにて職場見学

ウ 地域の教育施設や人材等の活用

神戸セミナー（予備校）校長　喜多徹人氏（臨床心理士）を招き、教員と保護者対象に講演会（研修会）を開催した。

エ 成果と課題

姫路特別支援学校は発達障害に特化した学校ではない。従って、本校生や教員が両校の交流を通して、直接「発達障害」について理解を深めようとするのは正しいとはいえないが、生徒ひとりひとりを「困り感」を持った存在として認め、支援していこうとする発想や方法は大いに学べるところである。

本校教員には、今回の事業を通して、特別支援学校における授業方法や、視覚支援・聴覚支援等様々な支援方法についての学びの機会を求める声が多くなってきた。また、次年度は、新たに姫路特別支援学校生による本校施設を用いての学習も予定されている。今後はそれらを生かしながら、さらなる交流の形を模索していきたい。

また、特別支援教育コーディネーターが兵庫発達障害者等就労支援連絡協議会の委員に就任したことは、本校にとって大きな収穫であった。この協議会をきっかけとして、労働局や教育大学等専門機関から助言を仰ぎ、個別支援を含むソーシャルスキルトレーニングの方向性を定めることができた。次年度はその計画の着実な実施が課題である。

兵庫発達障害者等就労支援連絡協議会

1 兵庫労働局職業安定部職業安定課
2 神戸公共職業安定所
3 灘公共職業安定所
4 若者しごと倶楽部
5 こうべ若者自立塾
6 こうべ若者サポートステーション
7 ひめじ若者サポートステーション
8 ひょうご発達障害者支援センター
9 兵庫県立姫路別所高等学校
10 総合リハビリテーションセンター能力開発部
11 兵庫県自閉症協会
12 兵庫県自閉症協会高機能ブロック「ピュアコスモ」
13 兵庫県ＬＤ親の会「たつの子」
14 日本パーソネルセンター株式会社

(4) 関連事業等との連携

特になし。

Ⅲ　今後の我が国における発達障害のある生徒の支援の在り方についての提案等

特殊教育から特別支援教育への転換は、ひとりひとりの特性に応じた多様な支援を、従来のように教室の外へ取り出すのではなく、通常学級の中で実施しようというものである。発達障害もまた例外ではない。個を見つめ、個に「やさしく」あろうとするその教育方法は、同時に集団全体にとっても「やさしい」ユニバーサルデザインをめざすものとなっていくに違いない。

ただ、その実現にあたり現状の枠組みでは困難な点が多い。特に学級定員・カリキュラム・特別支援コーディネーターのありかたについては早急な改善が望まれる。

Ⅳ　その他特記事項（エピソードを含む）

今年度の本校学校評価に溶かしこまれた、本事業に関する項目は以下の通りである。

①全校集会等ではプロジェクターなどを活用して生徒の視覚に訴える等、指導をより効果的なものとする。

②生徒・保護者に対して、教育相談に関する情報を提供し、心の教育を充実する。

③挨拶の仕方、話し方、聞き方などのソーシャルスキルトレーニングを実施し、社会性を培う

④キャンパスカウンセラーによる研修を実施し、生徒に対する効果的な指導方法を共有する。

⑤公開授業・研究授業等を利用して実践的な指導力の向上を図り、「わかる授業」づくりにつとめる。

Ⅴ　モデル校の概要

1　学級数と生徒数（平成 20 年５月現在）

課程	学科	第１学年		第２学年		第３学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	205	5	167	5	169	5	541	15

2　教職員数（平成 20 年５月現在）

校長	教頭	主幹教諭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	事務職員	その他	計
1	1	5	25	1	5	1	1	3	15	58